
シユウ～恋をした悪魔～

あきよ涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショウ～恋をした悪魔～

【Zコード】

Z6486D

【作者名】

あきよ涼

【あらすじ】

殺人者を裁く、ショウ。ショウは自分の過去を知らない。ある日、盲目の女性、アコミと出会い、ショウの心が変化していく。

俺の仕事。

それは、殺人者を抹殺すること。
人を殺したヤツは、殺されて当然。

それが世の習わしだって言うのに、いつの間にか人を殺しても何年
か税金を使って規則正しい生活をしたら下界に戻れる世界になつて
しまつたんだ。

おかしいじゃないか。

だから、俺が世を正すことにしたんだ。
この仕事には相棒が必要だ。
相棒のシャムだ。

コイツは血の臭いに敏感だ。

殺人が起これば、その匂いを嗅ぎつける。

この国でしか感知できないが、とりあえずは自分のいる世界から変
えてみようと思つたんだ。

今もシャムが血の臭いを感じた。

俺は人間じゃない。

人間の上にいる、新しい生き物なのかもしれない。

俺はどこで生まれたのか。
親がいないからわからない。

昔の話はもういい。

ただ、俺は一瞬で殺人の現場に行ける。
なぜかはわからない。

そこで殺人者の首を切る。
それでおわりだ。

今日の役目が終わった。

外出すると、すっかり日が暮れているのに女性が歩いている。

「すみません・・・」

話しかけられたが、ここで姿を見られれば俺の正体が世間にさらされると原因になる。

俺はその場を立ち去った。
近くの公園に身を潜めた。
今日はここにするか。
俺には家は無い。

毎日どこかで殺人が起るからだ。

「あの・・・」

さつきの女性だ。

やつかいだな・・・。

「道に迷つてしまいまして、どうかここに連れて行つては頂けない
でしょうか。」

女性はフラフラしている。

よく見ると、両手を閉じている。

「私、目が見えないんです。杖を無くしてしまって家に帰れないん
です。」

公園の電灯に照らされた彼女は荷物を持った両手を前に出し、こち
らに近づいてきていた。

「わかりました。」

彼女から地図を受け取り、目的地に向かった。

「こうゆう時のために地図を持ち歩いているんです。」

彼女が言った。

「そんなもの持つていても、誰も連れて行つてはくれないだろ。う。正
直な意見を言った。

世の中そんなものだと思つていてる。

「そうですね。」

彼女は苦笑いしていた。

到着したら、彼女は何度も頭を下げて家に入つて行った。

シャムがまた血の臭いを感じた。

俺は次の役目を果たすため、そこを立ち去った。

『 またしても、ホミサイドハンターの出現です。』

殺人者をホミサイドと言つ。

世間は俺のことをホミサイドハンターと呼んでいる。
ここまでしているのに、殺人は無くならない。

ガラスに[写つた自分を見る。

全身黒だ。

いつから着替えていないんだ。

まあそんなことはどうでもいい。

シャムがまた臭いを感じた。

俺は向かつた。

役目を終えて、俺は気の向くままその場を立ち去り、歩いていた。
すると、昨日の女性に会つてしまつた。

「あ、また逢いましたね。」

女性が話しかけてきた。

俺は逃げた。

気がつくと昨日の公園にいた。

なんでこんなところに来てしまつたんだ。

公園のベンチで一息ついた。

「なんで逃げるんですか。」

彼女が目の前にいた。

驚いたが、逃げられないと思つて俺はそのまま座つていた。
すると彼女が隣に座つた。

「昨日は本当にありがとうございました。」

「いえ・・・なぜあんな時間に?」

俺は何で話をしているんだ。

「母がいるんですけど、腰を痛めてまして。急に部屋の電気が消えてしまつて、電球を買いに行つていたんですよ。」

「 そうですか・・・ 」

「 何を和んでいるんだ。 」

「 早くここを立ち去れ。 」

「 つか、 田舎たりの悪い家なので、 電球は絶対に必要なんです。 」
「 この女の話は終わりそうにないぞ。 」

「 私、 こんななので、 今は按摩の専門学校に通っています。 あ、 私
はアコミツて言つます。 あなたのお名前はなんですか? 」

「 俺の名前・・・ 」

「 ・・・ 」

「 何だ? 」

「 俺の名前は何なんだ? 」

「 思い出せない。 」

「 俺の名前は何なんだ? 」

「 名前なんて捨てたつてことか。 」

「 シュウ・・・ 」

「 適当に答えた。 」

「 シュウさんつて言つたんですね。 もし良かつたらもう少しお話しして
くれませんか? 」

「 シュウを見た。 」

「 シュウは何事もなくあぐびをしている。 」

「 少しの間ならいいか。 」

「 はい。 」

「 俺はアコミツと話をすることにした。 」

「 うちの話をしているのですか? 」

「 ああ。 」

「 つか、 すぐ貧乏なんです。 母はいつも元気なんですが、 働
きすぎて腰を痛めてしまつて、 1か月くらい寝たままで。 」

「 そうですか。 」

「 父は私が小学生の時に病氣で亡くなりました。 」

「 はあ。 」

「 私の母は、 生まれた時から見えないみたいで。 」

「 はあ。 」

「はあ。」

「あの・・・」

「はい?」

「ほんと話していいんですか?」

「いいですよ?」

「そうですか・・・なんか、迷惑とかだつたら言つてくださいね。」

「はい・・・」

「シユウさんっていつもどんなことをしてるんですか?」

「・・・」

「何で言えぱいいんだ?」

「特に・・・」

「仕事とかは?」

「ちょっと特殊な仕事をしてます。」

「特殊な仕事ですか!なんかカッコいいですね。」

カッコいいか・・・

ちょっと一ヤけた。

「どこに住んでるんですか?」

「ああ、まあ・・・」

「この辺ですか?」

「あ・・・そうだね・・・」

「そりなんですか!もし良かつたら明日もいつかお話を聞いておきませ
んか?」

「いいですよ・・・」

「俺はなぜかそう答えて、アコミは帰つて行つた。
その日は何も無く、俺はこの公園で寝た。」

次の日、アコミが来た。

「ごめんなさい、待ちました?」

「こえ・・・」

珍しくシャムが何も言わない。

そうゆう時は暇だ。

「母が立ち上がれるようになつたんですよ。」

「それは良かつたですね。」

「はい！」

アユミの笑顔に癒されている俺がいる。

俺はどうしてしまつたんだ。

まさか、この盲田の女に惚れてしまつたつてゆうのか。

「子供つて元氣ですよね。」

前を見ると、子供が走り回つてゐる。

もちろんアユミには見えていなはずだが。

「こうやって子供の遊んでいる声を聞くのが好きなんです。」

「へえ、そうですか？」

俺には何とも思わない音だが。

「本当は目が見えたなら、保母さんとかそういう仕事をやってみたかったんですけどね。」

アユミは少し寂しそうだった。

俺は何て言つていいのかわからず、ただ黙つていた。

「シユウさんは子供のころは何になりたかったんですか？」

何だろう。

相変わらずよくわからない。

「正義の味方？」

とりあえず言つてみた。

「何ですかそれ。」

アユミは少し笑つた。

笑わせようと思つて言つたんじゃないんだけど。

「子供の頃の夢を叶える人つて少ないですよね。そうゆう人は羨ましいですね。」

「そうですね・・・。」

公園を出る彼女のうしろ姿がちょっと暗く見えた。

シャムが感じた。

俺はそこに向かつた。

相変わらず救えねえな。

こつゆうヤツらの首を切るのは本当にスッとする。

目には目を。歯には歯を。

それが人間の社会を成り立たせる最も効率的な方法なのに。

それがなぜ無くなってしまったんだ。

理解に苦しむ。

俺はただの殺人鬼じゃない。

ホミサイドハンター。

殺人者しか狙わない。

殺人者には殺人を。

俺はまたあの公園にいた。

そこに今日も彼女がやつてきた。

別に約束したわけじゃないけど、なんとなく。

「今日も来てくれたんですか？ 実は今日もここに来てくれそうな気がして、来ちゃいました。」

そう言って笑うアコミに癒された。

俺は、たぶんアコミに会いたかったからここにいるんだろう。

言いすぎかもしれないけど、この笑顔はこの世界のオアシスとさえ思えた。

が、さすがに話題が無い。

俺の話をしてやるうか。

もちろん本当のことは言わない。

ちょっとした作り話だ。

「今日は俺の話をするよ。」

「うん。」

「俺の家は、すごく金持ちなんだ。俺は学校で成績も一番で、いい

学校に行つて、いい会社に入つたんだよ。」「へ～。すごいね！」

「趣味はボランティアでね、老人ホームや障害者施設にもよく行つてるんだ。」「す～ごい！いい人だ！」

「あとは・・・」「

何も思いつかない・・・。

俺は、なんで嘘をついてまで自分をカツコよく見せたいんだ。アユミにどう思われようと、そんなこと俺には関係ないはずなのに。やはりこんな話をするんじゃなかつたか。

「私も、目が見えたならボランティアとか人の役に立ちたいなつて思うんだけどね・・・やっぱりこんななんじゃ逆に助けられちゃう立場だからね。」

そんなつもりで話したんじゃないんだけど。

そのあと、すこし沈黙が続いてしまつた。

失敗した・・・。

「じゃあ、私が話そうかな。」「

アユミが話を切り出した。

「私の昔の話をするね。」「

「ああ。」「

とりあえずいつものようにアユミの話を聞くことにした。

「私は生まれた時から目が見えなくて、母も父も見たことが無いわ。もちろん私自身の顔もわからない。だから、どうせ見えないんだから、想像してるの。ちゃんとした人間の顔をしていないかもしけないけど、自分の顔は私の中で一番の美人の顔を想像してるの。」

そう言つて笑うアユミは結構美人だ。

「実際も美人だよ？」

正直に答えてみた。

するとアユミの顔がものすごく赤くなつた。

「な、何言つてるの！お世辞はいいよ！」

す”く赤くなつたアコミはかわいかつた。

「小学校の時にお父さんが死んで、お母さんと2人になつて、それからはとにかく貧乏でね。私も苦労したつもりだけど、やつぱりお母さんはもつと苦労したんだろうな、つて思うと、将来は楽をさせてあげたいな、とか思うんだけどね。実際は無理だね、あつと。」
なんで世の中は不公平なんだ。

「つゆう人たちにもつとお金を分けてあげられたらいにのに・・・。
「あ、でもね。お父さんもお母さんも、私のことをす”く大事にしてくれてるつて感じたから、私はひとつでも幸せなんだよ。」
何でそう思えるんだ。

もつとひがんでもいいと思つんだけどなあ。

アコミは欲の無い、汚れの無い真っ白な人だ。
そんな人が世の中にいるなんて思わなかつた。
だからアコミといふと癒されるのかな。

「私の昔の話つて言つても、そんなにおもしろくなかったね。」

「そんなことないよ。」

「シユウくんの昔はどんな感じだつたの？」

「俺・・・」

昔のことはわからなー。

「シユウくんの昔の話が聞きたいや。」

アコミにそつう言われて思い出そつとした。

しかし、そうすると頭が痛くなる。

俺が下を向つていると、アコミは話題を変えてしまつた。

「ホミサイドハンターつて知つてる?」

「あ、ああ・・・」

よりによつてこの話題か。

「す”いね。人殺しが殺されるつて。」

「そうだね。」

「あれつてやつぱり組織なのかな。だつて、ど”でも殺されちやうし。」

「確かにそうだ。」

「学校でもみんなホミサイドハンターのこと話してるんだよね。」

「へえ。」

「私、ホミサイドハンターと話がしてみたいな。」「え？」

アコミの意外な意見に驚いた。

「怖くないの？人を殺すんだよ。」

「そうだけど・・・。」

「変わってるね。」

「ええ。私は変わり者ですから。」

アコミはそう言って笑った。

その時シャムがまた感じた。

「俺、用事あるから・・・。」

そこを離れようとしたとき、アコミが言つた。

「明日もお話しましょう。」

俺は返事をせずにその場を立ち去つた。

俺はホミサイドハンター。

これ以上アコミとは関わらない方がいいと思つ。

アコミのそばにいると、人を殺せなくなる気がする。

アコミはそんな力を持っていると思つた。

アコミは、きっとホミサイドハンターに会つたらこう言つだらう。

「もう人を殺すのはやめて。」

俺は頭が痛くなつた。

考えるのをやめて、シャムと血の臭いのするところに向かつた。

俺は殺人者の首を切る。

いや、実際にはそのイメージだけが頭にあるだけだ。

気がつくと、既に殺人者は目の前で死んでいる。

俺はどうやって殺しているのか、覚えていない。

ただ、首を切つた、と思いこむ。

今日も、気がつくと殺人者が倒れている。

その周りにはおびただしい量の血が流れていた。

俺は頭で殺したことイメージして、その場を去った。

シャムが俺の後をついてくる。

いつからコイツは俺の後をついてくるんだろう。

俺には本当に過去は無いのか？

俺の過去・・・。

いつかのようすに、鏡に映る自分を見た。

前と同じ服装だ。

全身黒い。

この服はどうしたんだ。

俺は何者だ。

考えるとやはり頭が痛くなる。

近くの木の陰で腰をおろした。

シャムが俺の横に座つた。

「ニヤー」

そう言つて尻尾を丸めて寝てしまった。

シャム猫じやない、ただの雑種の猫なのになんてシャムって名前なんだ。

なんで俺はホミサイドハンターなんだ。

そんなこと考えたこともなかつたのに、アコミに会つて俺は変わつてしまつた。

アコミが俺の過去を知りたって言つていた。

なんで過去のことなんか知りたがるんだ。

やめてくれ。

そう思いながらそのまま眠つてしまつた。

次の日、俺はアコミの公園にいた。

が、アコミのところには行かなかつた。

アコミは一人でベンチに座つてゐる。

俺はそれを遠目に見ていた。

これ以上アコミに関わると、俺は俺でなくなってしまう。

そう思ふと、俺はその場から動けなかつた。

すると、アコミがこちらに向かつてくる。

「なんで遠くからずっと見てるの？」

アコミは俺がここにいることをわかつていたんだ。

「俺・・・

黙つている俺に、アコミは見えない目で俺をみつめた。

「今日は都合が悪い？」

「そうじゃない。」

「じゃあ、私のこと、ウザくなつた？」

「そうじゃないんだ！」

俺は公園を出ようとした。

「明日はちゃんとといつもの時間に来てね！」

彼女はそう言つた。

俺は返事をしなかつた。

俺は公園を出た。

その時、俺の横を1台の原付がかすめた。

何かを感じて後ろを見ると、原付は彼女を轢いて彼女の鞄を奪つて逃走した。

彼女が倒れた。

俺は動けなかつた。

前の家の人気が、異様な衝突音を聞いて出てきた。

そのまま救急車が来て、彼女は運ばれて行つた。

俺はまだ動けないままだつた。

その時、シャムが血の臭いを感じた。

別の場所だつた。

でも俺は行けなかつた。

その日からシャムはいなくなつた。

気がつくと病院の中にいた。

彼女が寝ていた。

死んでいなかつた。

あれから何日たつただろう。

傍らでお母さんらしき人が泣いている。

アユミは目を覚まさない。

警察の人が病室に入ってきた。

犯人が捕まつたとのことだつた。

連續ひつたくり魔だそうだ。

フラつくアユミを勢いで轢いてしまつたらしい。

犯人はどこにいるんだ。

俺はその警察について行つた。

すると、犯人は留置場にいるとわかつた。

写真で顔も確かめた。

俺はその留置場に行つた。

アユミを轢いたヤツを探した。

夢中で探した。

その間の記憶が無いくらい必死だつた。

気がつくと、ヤツの前に立つていた。

「おい、お前。」

話しかけても返答がない。

俺のことなんで見えていないみたいだ。

俺はヤツの頭を掴んだ。

そして、次の瞬間・・・。

目の前に誰もいない。

場所は同じだ。

近くにあるガラスを見た。

アコミを轢いたアイツの顔だ。
なんで？

そうだ。

俺は思い出した。

俺は、死んだんだ。
あの時、殺された。

1年前、家に帰ると様子がおかしかった。

「お母さん？」

呼んでも返事が無い。

居間に入った。

「シャム？」

シャムは、うちの猫だ。

シャムって言つてもシャム猫じゃない。

ボクが拾ってきた猫だ。

拾ってきたときは、シャムのことをシャム猫つて思いこんでいたのに、次の日お父さんがそれは違うよ、って。
でも名前を変えることができなくて、シャムになっちゃったんだ。
いつもボクのそばにいるシャムがいない。

台所に行つた。

すると、お母さんが倒れていた。

「お母さん！」

起こしそうとしても、お母さんは動かなかつた。
足元を見ると、血がいっぱいだつた。

怖くなつて居間に逃げた。

すると、手に毛の感触があつた。
シャムだ。

「シャム、何があつたんだよ！」

シャムも動かない。

口から血を流している。

怖くなつて家を出ようとした。

「シユウイチ。どこ、行くの？」

振り返ると、お父さんがいた。

「お父さん！お母さんが！シャムが！」

お父さんに駆け寄ると、胸に激痛が走った。

お父さんから離れると、その手には血がべつとりついた包丁が握られていた。

ボクの服があつとゆう間に真っ赤になつて、立つていられなくなつて倒れた。

「お父さん、お仕事無くなつちゃってね。もう生活できないから、みんないなくなろうな。」

そう言つてお父さんは目の前に立つている。

ボクがもつと大人だつたら、お父さんはそんなこと思わなかつたんじやないのか。

なんでボクたちまで殺したんだ。

なんで生活できないとか言つんだ。

意識が無くなる瞬間、気がつくと、ボクは立つていた。

目の前に人が倒れている。

ボクだ。

そこには、ランドセルを背負つた9歳のボクが倒れていた。走つて洗面所に行つて鏡を見た。

そこには、お父さんがいた。

何が起こつたのかわからぬ。

ただ、ボクはお父さんを許さない。

持つていた包丁で自分の首を切つた。

次の瞬間、ボクは玄関の外にいた。

横には、倒れていたはずのシャムもいる。

ボクは大人の姿をしていた。

ボクは死んだ。

その日から、人を殺す人が許せなくなつた。

ボクはどこにも行けなかつた。

心だけがここにあつた。

心の闇のまま、殺人者を殺した。

全部思い出した。

俺は目の前のガラスを割つた。

コイツは殺人者じやない。

でも、どうしても許せない。

俺はどうしたらいいんだ・・・。

その時、物音に気付いた警察官がこちらに走つて来のがわかつた。

「うわあああ！」

どうしていいのかわからないま、俺は叫んだ。

そのままガラスの破片を首にあてた。

到着を待たずに、俺は自分の首を切つた。

気がつくと、留置場の外にいた。

俺は病院に戻つた。

アユミはまだ寝ていた。

俺は、人殺しじやない人を殺してしまつた。

世の中のために頑張つたはずだつたけど、結局は自分のためにやつていたんだとわかつた。

お父さんが許せなくて、どこにも行けない俺の心が他の殺人者をお父さんとダブらせていたんだ。

そつとアユミに近づいた。

もちろん、横にいるアユミのお母さんにも看護師さんにも、俺の姿は見えていないみたいだ。

なんで、アユミは俺を感じることができたんだ？

「アコミ・・・田を覚まして。」

俺はアコミにキスをした。

アコミは田を覚まさない。

涙が出てきた。

アコミはずつとこのままなのかな。

俺はどうなるんだ。

誰にも気づいてもらえず、消えることもできない。

永遠に彷徨い続けるのかな。

俺の目から涙がこぼれた。

その涙がアコミの頬に落ちた。

その時、アコミが田を覚ました。

「アコミー。」

アコミのお母さんと看護師さんが慌ただしくなった。

俺は、もうここにこられない。

俺は病室を出ようとした。

「シユウ！」

アコミが俺の名前を呼んだ。

アコミはやつぱり俺を感じてくれていた。

「アコミ、シユウって誰？」

「やつぱりここにいる男の人よ。」

アコミのお母さんと看護師さんは不思議そうな顔をしていた。

俺は走つてその場を去つた。

走つて病院を出て、これからどうしたらいいのかわからない俺は、ふらふらと歩きまわつた末にとりあえずあの公園に行つた。すると、そこにはアコミが座つていた。

「やつぱりここに来た。」

アコミはすぐに俺を見つけて、じりじり近づいてきた。

「『』めんね、シユウ。心配かけたね。」

「そつ言つて笑うアコミを抱きしめた。

「俺の見た目・・・どんな感じだと思つ?」

驚いたアコミが、静かに答えた。

「ちょっと陰があつて、背は私よりも少し高くて、年齢は私と同じくらいかな。で、すつごくかっこいいって思つよ。」

「ボクは本当は9歳の小学生だとしたら?」

「え?」

ボクの目は、涙でいっぱいになつてしまつた。

アコミは少し黙つた後、こつ答えた。

「じゃあ、私は十歳も年下の小学生に恋をしちやつたつてことにならね。」

その時、自分の体に異変を感じて、アコミから離れた。自分が消えてしまいそうな感覚。

ボクは、このまま消える。

そう確信した。

いっぱい悪いことをしたから、天国には行けないかな。でも・・・良かつた。

「アコミ。ボクとたくさんお話をしてくれてありがとう・・・。自分の身長が低くなつていいくことを感じた。手を見ると、ほとんど透明になつてゐる。

「『』行くの?」

アコミが心配そうな顔をしていた。

「アコミのおかげで、アコミに恋をして、本当の自分に戻れたと思う。」

そして、本当の自分に戻つて、ボクは本来の道を進むことができるようになった。

「『』めん・・・ボク、もう死んでるんだ・・・。」

「え? どうゆうこと? ゴーレイつてこと?」

「アコミ、大好きだよ。」

ボクはほとんどなくなってしまったしていく。

アコミのことも見えなくなってしまって、最後に聞こえた。

「シコウーになくならないで…コーレイでもいいからやめにしてよ

！」

アコミは泣いていた。

そしてボクは消えた。

ボクの初恋と一緒に、ボクは新しい道を歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6486d/>

シュウ～恋をした悪魔～

2010年12月31日14時41分発行